



生駒市立鹿ノ台小学校

鹿小だより



鹿ノ台小学校
ホームページ

令和 5年 6月 2日

第 5 号

いじめの矢 ←

6月はいじめについて考える月間です。5月29日に、「いじめに関するアンケート」を実施しました。

6月1日に行ったりリモートによる全校朝会で、いじめについて話をしました。今月の全校朝会は、もともとリモートで実施する予定でした。リモートのおかげで、手づくりの小さな教具を見せながら「いじめの矢」について話をすることができました。話の内容は以下の通りです。



ここに、一つの白くて丸いボール(発砲スチール)があります。これを皆さんの心だと思ってください。

そして、これがいじめの矢です。いじめには、どんないじめがあるでしょう。たとえば、「悪口」「いじわるな言葉」、「暴力」、「仲間外し」などがあります。これから、いろいろないじめの矢をこの心に刺します。

- ① この矢は、「あほ」「ばか」「ぼけ」「きもっ」「死ね」「うざっ」など“**言葉の暴力の矢**”。
- ② この矢は、「机やノートに落書き」をする、人の物を隠したりとったりする“**嫌がらせの矢**”。
- ③ この矢は、「〇〇とは話すのをやめよう。」などと言ってとその人が来たら急に会話をやめたり、逃げたり、避けたりする“**無視や仲間外しの矢**”。
- ④ この矢は遊ぶふりをして、たたいたり蹴ったりする“**暴力の矢**”。
- ⑤ この矢は、失敗したり、人と違っていることを笑ったり馬鹿にしたりする“**からかいの矢**”。
- ⑥ 最後の矢は、本人が嫌がっているのに、しゃべり方や動きをまねする。これも“**からかいの矢**”。

これ以外にも、人の心に突き刺さる矢はあることでしょう。

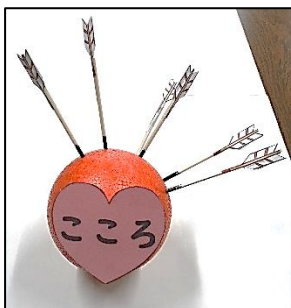
いじめられた人の心には、外側からは見えなくても、このようにたくさんの矢が刺さっています。実際にはもっとたくさん矢が刺さっているかもしれません。この心は、心が引き裂かれたり、壊れたりしてしまうかもしれません。ひどい場合には、死んでしまう人、学校に来られなくなる人、家から出られなくなる人もいます。心が壊れてしまう前に、いじめの矢を抜かないといけません。

しかし、いじめの矢は、いじめられている本人だけでは簡単に抜くことができません。どうやったら抜くことができるのでしょうか。それは、周りの人から、「一人じゃないよ」「一緒にいればいいよ」「私が付いているよ。」「味方だからね」「大丈夫だよ」と声をかけてもらったり、励まされたり、そばで寄り添ってくれたりすると、矢を抜くことができます。また、いじめの矢を刺した人が、反省して心から謝り、もう二度

としない誓うこともよいでしょう。そして、みんなでいじめをやめさせることです。

皆さんも、自分の周りにいじめの矢が刺さっている人がいたら、声をかけ、励まして矢を抜いてあげてください。

でも、この心をもう一度見てください。いじめの矢が抜けても、まだ穴の跡が残っています。10年たっても20年たっても忘れることができないことがあります。だからこそ、いじめは絶対に許してはいけません。



ときどき、いじめられる人にも原因があるという人がいますが、そんなことはありません。どんな理由があっても、どんな人であっても、このように心に穴が空いていいはずがありません。

皆さんの中には、ちょっと意地悪をしてしまったり、乱暴だったり、口が悪かったりする人もいるかもしれません。でも、そんな人も、本当は根っこのところで、とっても素敵で優しい心を持っています。何かのイライラやつらい出来事があって、そんなことをしてしまうかもしれません。そんな子ども、親や先生たちにとっては何となく大切な子どもたちです。そんな鹿小の子どもが、こんなふうになってほしくありませんし、また、このようないじめの矢を刺して平気な人にならなほしくは、ないのです。

そのためにも、いつも言っていることです。人と人がつながる素敵な言葉を使いましょう。ありがとう、大丈夫だよ、など人の心を温かくする言葉やいじめの矢が抜けるような優しい言葉をかけていきましょう。一つ一つの言葉を大切にしていってほしいと思います。一人一人が、自分たちの言葉がけや振る舞いを今一度よく考えていきましょう。

「いじめ」の定義

いじめとは、「児童生徒に対して、当該児童生徒が在籍する学校に在籍している等当該児童生徒と一定の人間関係にある他の児童生徒が行う心理的又は物理的な影響を与える行為であって、当該行為の対象となった児童生徒が心身の苦痛を感じているもの」を言います(平成 25 年度いじめ防止対策法)。平成 18 年度以前は、「一方的に」「継続的に」行われていたことであるとか、被害者が「深刻な」苦痛を感じているものといった、表現がありました。18 年度からは「一方的に」「継続的に」「深刻な」といった文言は削除されました。

ですから、昨今では、たとえ軽微なものであっても上述の定義に該当する事例は、いじめとして積極的に認知し、「いじめ」の事象をもれ落ちなく掘り取り、聞き取りと指導を行うことで、「いじめ」に苦しむ児童生徒を少しでもなくすよう学校は取り組むようになってきています。

「いじめ」という言葉を聞くと、きわめて「深刻な」事例として受け取られる向きがありますが、いじめに関するアンケートの説明*にもあるように、「1 回だけであっても、小さなことだと思っても、『いじめ』と考え」、本人が心身に苦痛を感じている場合はいじめとして認知し、双方から聞き取りを行い指導していきます。

*アンケートの説明には、「馬鹿にされたり、悪口やこわいこと、いやなことを言われたりする」「なかまはずれや、むしされる」「ぶつかられる、たたかれる、けられる」などの例が挙げられています。

状況を見て判断する



こんな光景に出会いました。ある日のそうじの時間。場所は、靴箱前廊下。ぞうきんがけのためしゃがんで横一列で並んでいる 6 年生が 3、4 人いました。

よーいどんで走り出すのだろうかと思って聞いてみると、「(そうじの移動のために) たくさんの方が廊下を歩いているから、待っているんです。」と教えてくれました。これは、私がかつてでした。競争のために、F1 レースみたいに一列に並んでいるのかと早合点をしてしまいましたが、移動する人にぶつかっては危ないと判断して、待っていているのです。確かに、しゃがんでいるのは、人通りがない隅の方です。状況を見て判断して行動する 6 年生の子どもたちでした。

そういえば、雨の日、学童前の通路で腕を上には伸ばして傘を突き上げている子がいました。「どうしたの?」と訊ねると、「低学年の子の傘とぶつかったら危ないから。」と言います。

成長とともに、状況を見て、判断して行動ができるようになってくるのですね。